

「現代と透谷の精神」

色川 大吉 氏

私は歴史家ですので、平岡さんのように細かい文学的な、内面的な分析というのはよくできませんから、その点は期待しないでください。

お配りしたのものにもちょっと書きましたけれども、私は早稲田大学では、きょうで三度講演をするんですけど、一九六八年十一月、いまだ二十六年前、まさに透谷が生まれた年生誕百年で、この時は大隈講堂が超満員になった。その理由は、一つは当時日本は学生が日本歴史を動かした時代なんです。一九六八年、六九年というのは、毎日、新聞を見ますと、一面トップ、あるいは二面、三面、社会面はほとんど学生の記事で埋まるという時代があったんです。信じられないようなことかと思いますが、全国の大学の三分の二が無期限ストライキか、あるいはバリケード・ストライキに入っているというような状態、それが半年以上続きまして、早稲田も大変な騒ぎでした。東京女子大とか、日本女子大なんかまでがバリケード・ストライキをやるというような状態でしたから。

そういう時代、一九六八年の、まさに学生の季節の真つた

だ中でしたから、透谷は早稲田の先輩であり、また戦う思想家として、当時の全共闘系、あるいは全学連系の学生諸君から絶大なシンパシーといえますか、共感を受けていたんだと思います。超満員でした。

もちろんもう一人役者が、吉本隆明という、いまは見苦しく老いぼれましたが、当時は新鋭の思想家で、新しい作品を次々と出して、若者のアイドルのような存在でありましたので、吉本さんが来たということも大きかったと思います。

それから十三年経って一九八一年十月というのがあるんです。いま二十六年経っているわけですが、そのちょうど真ん中、いまだ十三年前、そして六八年から十三年後ですが、この小野記念講堂で自由民権百年の集会があった。私が講演者で、これは学生の企画でした。六八年のときももちろん学生の企画なんですけれども、あれは早稲田の学生歴研みたいなのが中心になったのかは忘れちゃけれども、歴史関係の集まりだったと思います。これは超満員でした。この外まで溢れ、ずうっと聞いていましたね。あの状況はいまでも思い出しますが、ものすごい熱気が感じられました。そして十三年、今日は寂漠としてお通夜のごとしという……。

この二十六年間、私は早稲田大学で三つの経験をしつつあるわけです。かつて学生が歴史を推進していた、動かしていた時代の、あの早稲田大学。そして十三年前、自由民権百年ということでもう一ぺん燃え上がった、この学園の若者たち

の企画。そしていま。

こういう状況を見ていますと、もちろんきょうも学生は何人か来ていますけれども、「現代に生きる透谷」なんて言うのと、これはナンセンスという感じがするんですね。現代に生きていないじゃないか、現代に生きているならもうちよつと来てもいいはずじゃないかと、こういうことになるわけですが。この「現代に生きる」という意味を「生きる可能性を持っている」というふうに言い直したほうがいいと思いますが、そういう問題についてお話したいと思います。

私は透谷とはほんとに一生の大部分をつき合ってきたんですが、私の新刊の『北村透谷』という本の後ろのほうを見ていましたら、透谷について二十二本も論文を書いているんですね。最初はなんと一九五六年の論文ですから、もうそろそろ四十年近くなります。で、大学の卒業論文もまたこれ透谷なんです。大学は一九四八年ですから、もう二年もするとそろそろ五十年なんです。それこそさつきの話じゃありませんけれども、「透谷の三倍近く生きていて、その断簡零墨を追い回して何の学者ぞよ」と言われそうですけれども、それだけの魅力があつたことは確かです。それは平岡さんが先ほどおっしゃったことだと思えます。平岡さんとのおつき合いも三十年ぐらいいなると思いますが。

私の透谷に対する関心は、大きくいつて三つ変化してきました。これはまた日本の戦後の意識がそれに反映されている

と思います。

透谷は二十五年と四カ月ほど生きるわけですが、戦中は、私たちには「長生き」という感じがしたんですね。二十五年も生きられたら立派だな、いいなあと思った。私たちは大体二十代の前半で「もうだめだろう」と。だってアメリカ相手の戦争ですからね。だから透谷のように二十五年まで生きられて、そして恋愛もし、挫折もし、そしてまたあれだけの文学的な活躍をして、自分の手で自分の人生を締めくくると。もう理想というか、羨ましいような存在というふうに思っていました。昭和十四、五年頃から透谷を読んでいるんです。

ですから透谷に対する共感というのは、私たちの置かれてきた時代的な状況がそのまま投げ込まれていたんだと思います。戦後、軍隊からまた大学へ戻って来て、卒業論文に取り上げるとき私の透谷に対する関心というのは、戦後は日本に真の近代をつくらなきゃならないということが大体一致した目標だったんです。日本は近代じゃなかったんじゃないかと。たとえば私は軍隊から帰って来て福沢諭吉の「学問のすゝめ」とか、「文明論之概略」を読んだんです。あの著作は八十年も前なんです。で、非常にショックを受けた。なんだ、歴史は後ろに向かって進んでいたのか。われわれよりも一世紀も前に福沢はすでにこんなことを言っているのかと、それから日本は一体何をやったんだ。後ろ向きに進んできて、それで僕らのような意識になったんじゃないのかという、非

常にショックを受けましてね。とにかく福沢がやろうとして実現しなかった、そういうものをやり遂げること、つまり近代の達成。その近代といっても、日本の資本主義がたどってきたような近代ではなくて、真の近代。その真の近代というのは、あの当時は、「内面的な近代」なんて言われていました。ですから敗戦後は内面的な近代を目指そうと。

そのときに指標的な人間として浮かび上がってきたのが北村透谷なんです。透谷こそ近代の形成期に日本の現実の国家や社会が歩んだ近代と格闘した人間、そして内面的な、真の近代をつくろうとして苦闘した人だ、で、それが達成できずに倒れた人だと、そんなふうに戦後は共感しまして、それで卒業論文なんかにも取り上げたわけです。

それからまた十年か二十年経ちました。そして六八年のあの生誕百年の頃、これは若い世代から突きつけられた、一体近代とは何なんだと、近代に対する根本的な異議の申し立て、近代をもう一ぺん根本的に見直さなければならぬというときに、また別の光を透谷にそういう角度から与えてみたわけです。

ですから近代の限界を背負った透谷が、近代の形成期という非常に悲劇的な状況の中で、トータルにその時代と自分の内面的な課題にぶつかっていった、それを再評価したいというような意識に変化していったわけです。ですから透谷と近代をめぐる関係の段階的な変化が戦後の私たちの意識の中に

あったわけ、したがって透谷へのアプローチの仕方も変わっていった。

大きくいうとそんな三つぐらいの関心の変化があったかと思えます。その意味で、二十何本、四十年近く、いろいろ透谷に関する論文なんか書いてきて、そして最後にこの本をことし東大出版会から出したわけです。予想では、もっとたくさん読者が、透谷の百年だし、私といままで二十何年間つき合っていただいた読者もかなりたくさんいますから、その読者がこの私の決算を見届けてくれる意味で読んでくれるだろうと思ったら、やっぱりそうじゃないですね。僕のほんとうの読者はもう死んじゃったんだとまあ諦めていますけれども。

それはとにかくとして、この問題意識の三つの変化を踏まえながら、ちょっと大きな物差しをもって透谷の存在を評価してみたいと思います。

先ほどの平岡さんのお話によって大体透谷という人がどんな仕事をしたかということはわかりかと思うので、そういうことはもう二度と触れませんが、先ほどの平岡さんのお話は、まさに多年の蘊蓄を傾けられた、すばらしいもので、僕も久しぶりに聞いて大変すばらしいと思いました。あの中で三カ所ばかり私に対する根本的、徹底的批判をやっているんですが、ただ長い友情があるものですから名前を出さないだけのことなんで、それについては後でちょっと私も言

います。

透谷のことを考えるとき、いつも彼の人生に非常に大きい影響を与えた二人のキーパーソンを思い浮べるんです。透谷の人生にとって非常に大きな影響を与えた、透谷の生涯の方向を変えるカギを握った人ですね、キーパーソンです。

最初の一人は大矢正夫という人です。これは大矢蒼海と書くんですが、「おや、そうかい」という、例の明治調のふざけたペンネームですけれども、「くたばつちまえ」というのと同じですが。その大矢蒼海という人物は、透谷の前半、彼の人生を二つに分けたとして、自由民権運動とか、政治とかというものと非常に深い関係があった時期のキーパーソンです。で、この大矢蒼海をどう卒業していくか。大矢蒼海の限界、大矢蒼海というものとどう決別していくかということが透谷を評価する上で非常に大きい問題です。

結論から先に言えば、透谷は大矢蒼海を卒業できなかったと僕は思っているんですよ。透谷は大矢蒼海と決定的に決別できなかった。それは透谷の後の思想の迷いになって出てきます。

それからもう一人のキーパーソンは石坂ミナ子という女性です。これはもちろん透谷夫人になる人です。この石坂ミナ子がいなかったら透谷はあの大矢的世界から透谷が現実にしたような方向に展開できなかったろうと思う人物ですね。まさにキーパーソンです。その石坂ミナ子を透谷は「我が第

二の大矢」と言っています。大矢正夫というのは無二の親友ですからね、水のように淡い友情であつたと。

大矢正夫という人は非常に淡白な人で、俗物的な性格の非常に薄い人で、政治家です。壮士なんですけど、普通のその辺にゴロゴロしている壮士とは一風違つて、独自の品性と潔白さを持った、また非常に物わかりのいい、まあ透谷が無二の親友というぐらいですから、得がたい友人だったんですね。

それをとらえて「第二の大矢」と言っているぐらいですから、石坂ミナ子というのもやっぱり大変な親友だったろうと思います。さあ、このミナ子とは透谷は自殺という形で決別するわけです。何しろ自分の妻ですからね。妻を残して勝手に死ぬんですから。断りなしに。これで、透谷はよく決別し得たかと。そこも問うてみると、また問題が後に残ってくるだろうと思います。

まず第一の大矢正夫という人をちよつとご紹介しますと、透谷より年が四つぐらい上なんですけど、自由民権運動に参加する時期はほとんど同じです。透谷は自由民権運動のクライマックスの時期、自由民権運動が一番華やかな、そしてまた多くの人から支持された時代ではなくて、むしろ自由民権運動が衰退期にさしかかった、弾圧に次ぐ弾圧のような、非常に逆境に立った時期に彼は参加しているんです。ですから自由民権運動と文学者ってひと言で言いましても、東海散士や矢野竜溪とか、ああいう政治小説家たちとは違うんですね。

彼らのように自由民権運動のいい時代を通じていないんです。彼が本格的に参加したのは明治十五年、早稲田に入った年です。それから、時はもうすでに運動は衰退期というか、弾圧を受けて、だんだん潰されていく時期になっています。そして三多摩というところで彼は青春時代を送るわけですけれども、その三多摩も十五年の前までは、たとえば憲法案がつくられたり、あるいは何十という学習結社が生まれて、青年たちが自発的な勉強会をやったりして、思想的にも非常に実りのある時期だったわけです。精神的にも、自由論、民権論というようなことで非常に高揚していました。だから文化的、思想的な成長を示していた時期なんですね。

透谷が参加した頃は、そういうのが一転して、十五年ぐらいからそういう動きがずうっと後退してきました、どつちかというところという諸君が政治的な焦燥感、あせりの感情に追い詰められてきますから、過激派みたいに急進化していきます。いわゆる武闘路線というか、力で権力を倒すという方向へ行くわけです。だから学習結社のメンバーの持っていた雰囲気とはきわめて違う、自分の命をかけて敵を打倒するんだという、そういう壮士的な雰囲気、強い時期に彼は自由民権運動の青年グループの中に入ります。

そういう中でも、彼はもちろん内面的な青年でしたから、いろいろな本を読んだりして、ものを深く考えるようなタイプであった。そのために三多摩の壮士仲間からは「どうも気に

くわない野郎だ」、「本ばかり読んで、懐にいつも本を入れて、なんか憂鬱そうな顔をしているやつだ」というふうに思われていたようです。まあ大矢正夫はそういう透谷に対しても非常な理解者だったわけです。

透谷はそういうふうな運動参加の時期が一般の運動家より遅くて違ったために、民権運動に対する歴史的評価も、「明治文学管見」という自分の歴史的決算をやる大論文がありますが、その中でも自由民権運動の評価がうまくできないんです。『明治文学管見』というのは自由民権運動の始まるころで終わっちゃっている、中断しちゃっている。彼が一番政治にコミットした、一番深く現実と関わり合ったはずのその時期が、歴史的に相対化できないんです。それは彼にとってちょっと気の毒だと思います。

ということ、その時期と一緒に活動した民権青年たちと彼はほんとに決別していなかったように思うんですね。その一例として大矢正夫との関係を考えると、はっきりするんじゃないかと思うんです。

大矢は、まあこれは有名なことですが、自由党が解党させられました明治十七年の終わりぐらいいから非常に急進化しました。自由党の解党のきっかけをつくったのは、茨城県の加波山というところで自由党員が爆弾を持って武装蜂起をやったために、警察や憲兵隊の弾圧を受けて潰されるわけです。そのときに大矢はその武装蜂起組の仲間に入る誓約を交わし

ていた男なんです。つまり急進派ですね。早稲田にもずいぶんそういうのがおりましたし、いまでもいますが、そういう急進派の人ですよ。

ただ、彼は病氣をして、透谷の援助なんかを受けて、三多摩の素封家の家に静養しに行っていたものですから、連絡が悪くて、その武装蜂起に参加できなかったんです。そこで非常に悶々としていた。その悶々としている大矢正夫を訪ねて、明治十七年の秋から翌年の早春にかけて透谷はその川口村というところで大矢と一緒に生活していたと思われるんです。

そのとき透谷も急進派壮士という革命家の熱情というようなものに多少引つ張られていたと思うんです、共感もしていましたでしょう、そういう人間の潔さというようなものに共感をしていた。侍の息子ですしね。

明治維新はついこの間のことです。西南戦争であれだけの大戦争をやったというのはほんの五、六年前ですからね。ベトナム戦争、朝鮮戦争なんていうのよりはまだずっと身近なんです。

だからその時代の感覚で考えてみるとわかるんですが、侍の息子で、しかも民権壮士で、権力の打倒、自由のさきがけになろうなんて言っていた民権派の青年が、その武装蜂起に行き遅れた自分の親友と一緒に二、三カ月暮らせば、どんな精神的共感を強めたか、もう言わなくてもわかるようなものだろうと思います。そこから決別するのは容易じゃないです。

よつぽどのことがないと、それを振り切つて、自分独自の生き方、「俺は文学の道へ行く」なんて、そう簡単に言えないわけですね。

そのときによく言われるのは、透谷が政治から離れて行くきっかけは大阪事件だと。まあ大阪事件というのも非常にわかりにくい事件なんです、簡単に言ってしまうと、国内の状況が民権家にとって非常に不利だから、朝鮮に壮士の行動隊を送り込んで、当時朝鮮の王宮の中に親日派と親中派（当時の清国に近い派）の対立があった。それと同時に親日派には文明開化派の活動家というのがいて朝鮮の内政改革を考えていた。そういう諸君を日本の自由民権家が行動隊を送り込んで援助して、朝鮮王室の保守派を打倒して、そして朝鮮にまあ民主的な政権をつくらせようと。

当時清国と日本は朝鮮に内政干渉していましたから、朝鮮に日本も清国も軍隊を送り込んでいました。だからそのクレーターが成功すれば清国と日本の間に武力衝突が起こるだろう。武力衝突が起これば、日本と清国との間の民族感情に火がつく。で、民族感情に火をつけることによって政治的な関心を失いつつある国民にもう一ぺん明治維新のような覇気を蘇らせるんだ。非常に迂回戦術でしょうけれども、その力で国内の民主革命を一挙に推進するというような、当時としては迂回作戦みたいなことを、メンバーというよりも、その指導者たちが考えた。その指導者たちの自由党左派の急進指

導者たちの戦術に同調して、大矢正夫は朝鮮に出かけて行って一旗挙げるということになったわけなんです。

そのときに透谷にも誘いをかけた。一緒に行ってくれと。朝鮮に行ってくれというんじゃないで、資金を集めるために強盗をやるから、強盗と一緒にいって誘いをかけた。彼は二回も三回も計画して、ことごとく失敗したんです。とうとうぎりぎりのところまで追い詰められて、今度失敗したらもう自分は逃げ出さなくちゃなんというところまできたところで透谷と一緒にいってこれといったらいいですね。この辺のところは残念ながら透谷は「三日幻境」で非常に抽象的にしか言ってます。

大矢正夫もまた『大矢正夫自叙伝』の中で透谷を誘ったことは一行も書いていない。もちろん自分が窮地に追い詰められて大阪事件に参加したことはものすごく詳しく書いているんです。ところが透谷については一行も書いていない。これにはもうほんとにガッカリしましたね。『大矢正夫自叙伝』を一生懸命になって探したんですから。それでようやくそれに巡り合っ見て、むさぼるようにして一晩で読んだんですが、透谷のことはたった一箇所しか出てこない。それは透谷に助けられて、何がしかの金をもらって、病氣治療のために横浜へ行っったという、それしか書いていないんですね。村じやなくて、大矢はまず横浜へ行っって、横浜から南多摩郡の川口村のほうへ送られるんです。

まあこれは後の話になりますけれども、大矢正夫の方は透谷を卒業しちゃったんです。あれを見たときに、晩年その自叙伝を書いた頃は、「ああ、大矢は透谷と関係ない存在になっていたな」と思いました。ところが透谷のほうは大矢を卒業できなかったとみえて、大矢が徳島の監獄へ入りますと、送金をしたり、自分は裏切った側になりますから、非常に心の苦しみを表現したりしているんです。で、彼が出獄して来ますと、横浜の公道倶楽部へ訪ねたりしている。当時もう結婚していたんですが、そのミナ子に断りなしにこっそり会いに行ったりしているんですね。で、明治二十五年の例の「三日幻境」を書いた夏には、大矢と透谷と秋山国三郎の三人で、もう一ぺん川口村であの八年前の状況を再現したいという思いが透谷はあつて再会しようとするのですが、大矢は断っているんですね。

どこにその原因があるんだろうか、よく見ていきますと、大矢正夫が大阪事件に参加していったということの中にそれはあった。向こうから頼まれたのでも何でもないので、韓国内政に非常に乱暴に日本の革命家たちが首を突っ込んで、相手側にクーデターのようなものをやらせ、それを利用して自国の民主革命をやらうというような、根本的に逆立ちした、倒錯した考え、そういう思想ですね。で、すでに日本は韓国を従属国のような状況に置いてあった。もう十年も前の日朝修好条規によって日本は韓国を従属国的な扱いにして

いる。しかも日本軍隊がソウルに駐留しているというような状況。それを全く問題にしないで、そういうことは黙認したまま、韓国の民主化に名前を借りて、自分たちの力でやるべきことを外的な力を利用して実現しようというような、そういった思想を疑うことなく信奉してついていた大矢たち自由黨員の思想、そういうものに対して透谷は批判できていないんです。ひと言も書いていないんです。

それどころか、透谷全集をどんなによく探しても、韓国や朝鮮という言葉は出てこないんです。朝鮮は一個所だけ。つまり大矢が朝鮮の挙に加わったという、その大矢の行動を表現したところだけです。その「朝鮮の挙」に参加したという、そこだけで、あとは何も出てこない。アメリカとか、米国なんていうのは五十カ所も、六十カ所も出てくるんですよ。ところが韓国は全然出てこない。

大矢正夫が道を誤っていくその転回点になっているのは、まさに日本と韓国の革命の、この逆行関係の思想課題なんです。それが、それで踏み誤ったところを彼が全く正視できなかった。それから大矢は透谷が死んだ直後ですが、日清戦争のどさくさに韓国王宮へ出かけて行って、クーデターまがいのことを謀っている。大矢はたまたまそこへ参加しなかったから罪を逃れますけれども、大矢の同志たち、同郷の愛甲郡の民権家たちが王宮へ斬り込んで閔妃を殺害してしまう。これは重大な政治的な誤りですね。そういうあやまちを結局大矢は二

度繰り返す。そのため大矢は公民権を失ない、一生アウトローで暮らすようになるのです。

こういった軌跡を描いていく自分の親友に対して、あれだけの思想家である透谷がほとんど何も評価できなかった、かつ批判もできなかったということは、これはよく考えてみると、出獄後の大矢正夫たちについてまでもある未練を持ったというこの思想的な原因ではないのかと私は思うんです。もちろん非常に短絡的にそんなふうに言っちゃうとおかしいんですが。

後で透谷というのは新しい国民概念を提起して、今はやりの言葉で言えば、近代国民国家に対する一定のビジョン、こういう国家であらねばならないというビジョンを打ち出しますが、近隣諸国の民族に対しては問題意識が全く欠落しちゃっているという、というよりマイノリティーに対する理解が全く欠落しちゃっている。

たとえばアイヌなんていうことは全然出てきませんし、沖縄も一個所も出てこない。全く視野の外です。同時代の民権家で、植木枝盛とか、中江兆民とか、河野広中なんかの中には沖縄の問題というのはかなり出てきますし、自由新聞の中にも沖縄やアイヌの問題は出てくるんですが、透谷には一カ所も出てこないですね。完全にマイノリティーに対する目くばりというのが感じられないのです。

それで非常に観念的に国際平和とか、あるいはヨーロッパ

の戦争状態に対する憂慮というようなことが雑誌『平和』などには盛んに出てくるんですが、非常に身近なところの問題が抜けちゃっているんですね。

これは大矢だけではありませんで、石坂公歴が明治十七年に読書会というのをやって、透谷もその仲間の一人なんですが、その読書会に参加した会員というのは、静修館という神奈川県自由党の合宿所の連中とダブっているんですが、その諸君というのは、日本と韓国の状況が軍事対決で非常に緊張したとき、明治十七年十二月、デモンストレーションを上野公園でやった。それを新聞なんかで見ると、特に三多摩壮士団はひとときわ異様の体をなしている豚の首を切ったり、鶏の首を切って、それを竹竿の先に刺して行進した。血のしたたる鶏の首を掲げていたということです。鶏や豚というのは朝鮮のこと、中国のことです。それは明治十八年一月です。そのとき、すでに大阪事件の秘密計画が進行していて、その後大矢正夫は大阪事件の行動隊に加わっていくんです。それは大矢ではなくて、明治十七年、読書会グループで一緒になった神奈川県民権家たち、透谷の友達たちがそれをやっているわけですね。そういうことに対する思想性ということを、いままでの透谷研究者は全然問題にしなかった。これはどうしてかという、研究者のほとんどが国文学系の人たちであつたから。国文学者というのは詩とか、内面とか、神とかいうのは好きですが、そういう血生臭いものはあんま

り気に入らないわけで、避けていくわけです。で、僕みたいなのがやると、「あいつは文学がわからなくて、透谷の外側だけを三十年も突つついて歩いた」というふうに言われるんですけれども、外側も内側も非常にくっついていたんですから、外側を無視するわけにいきなりですね。

透谷にとつての第一のキーパーソンである大矢正夫たちの持っている壮士的な思惟様式と申しますか、考え方、これはたとえば公と私というものに対する観念、国と家、家族というものに対する観念、あるいは天下国家というものと個人というものと対比する価値観。そのときいつも上位観念は公であり、天下であり、国家であつて、これはもうア・プリオリにそういうふうに思い込んでいて、そして天下や国家や大義のためには個人というようなものの生命を惜しみなく捨てる、それを良しとするような価値観であつたと思うわけです。だから大矢正夫が強盗をやれと言われ、一番苦しんだのは、自分の命を国家のために捨てるのは何のためらいもない。だけれども、自分の行動のために親も子も、あるいは一族一門の名がそれで償うことのできないほど傷つけられるということが耐えられないのだと、それが一番の苦悶なんだと。

こういうのは、ヨーロッパ的な個人原理とか、自由民権とかと違う。天赋人權とかという西洋的な原理とは全く無縁です。まあそれでも革命家なんですが、欧米とは無縁のところからでもそういう発想は出てくる。

こういうことに對して透谷は反発します。その透谷の政治觀の離脱の一番大きなきっかけは、そういった壮士の行動に現れた思惟様式、それに対して自分とはとても同調できないという違和感であつたろうと思います。

そういう意味では、第一のキーパースンの大矢は、透谷のその後の文学者への自立の道の反面教師になり得ているわけです。これは政治への絶望というより、政治家、政治屋への絶望であつたわけですね。

ミナ子はそういう透谷が絶望した後で、どう生きていいのかわからない、ある意味では自暴自棄になつていた時期に、そういった精神的な奈落の状態のところに手を差し伸べて救い上げる役割を果たす。ミナ子を通して、神、恋愛、そして内部生命というようなものをつかんでいく。それがなかったら透谷の文学は成り立たなかつた。

そのときミナ子はクリスチャンで、透谷はクリスチャンじゃなかつた。そのミナ子というクリスチャンを通して、透谷は自分の知らない未知の世界を開いてもらった。自分が人生の生きる意義を見失つて自暴自棄になつていた、その状況から新しい世界に出ていくわけです。ミナ子はまさに第二の大矢正夫であり、キーパースンなんです。

彼はもちろんミナ子を介してキリスト教に入りますけれども、透谷は外部に絶対的な神の實在を生涯ずうと信じ続け

たか、これは僕はいまでも疑問なんです。これはさっきの平岡さんの意見と違ってくるわけですけれども。もちろん入信したときはそれを信じます。

恋愛についても同様なことが言えましょう。壮士の時代、透谷は遊廓なんかへ行つて女郎を買つていましたから、女性を知らないわけじゃない、知つているんです。だけれども、いわゆる精神的に尊敬し、物欲的なもの、性欲的なものではない、敬愛の対象としての女性、それを他者として発見するというのはミナ子という存在がなかったらできなかつたんですね。

ミナ子は三つも年上ですし、彼よりもはるかにキリスト者的な内面世界に触れていた。横浜のミッシェンスクールなどで何年も勉強していましたが、外国人宣教師たちの世界で学生生活をやって、そういったものに透谷よりはずっと近づいていたわけです。

で、男を見る場合でも、立身出世とか、自分に経済的な地位を保障してくれる男がよいというんじゃないで、もつと自分と生涯の事業を共にしてくれる人、神の導きの活動と一緒にやってくれる人、そういう男こそ自分は求めているんだという、そんな意識段階に達していた女です。そういう女性と巡り会つたわけですから、透谷は目から鱗が落ちるような思いをしたと思うんです。

だからそういう意味で敬愛の対象、しかも対等の人格――

一時は対等以上と思つていたかもしれませんが——としての女性を発見した。これは明治では希有な例ですね。なかなかそういう巡り会いはなかったらうと思うんです。

だから、いままでの透谷研究者は透谷がミナを発見して、透谷がミナを介して入信し、内面生命とか、新しい恋愛像をつかんで、それを文学化し、言語化していく過程で、ミナ子よりもはるかに高い世界へ行つてしまつて、逆にミナ子とのギャップができてくるというような、言い方をしますが、立場を換えてみますと、ミナ子が透谷を必要としていた、ミナ子が透谷を選んだとも言えるのではないか。

どうしてそういうことが言えるかというと、ミナ子はそのとき平野友輔という、まさに東京大学の医学部の別科を卒業した、もうバリバリの自由民権家で、経済的にもちゃんと確立して、藤沢の名家の、名望家の長男と婚約していた。社会的地位も高く、民権家から大変信頼されていた。三多摩では石坂昌孝というミナ子のお父さん、それに次ぐ人、石坂昌孝は自分の後継者として嘱望していたのが平野友輔という民権家だったのです。その人と親が決めた結婚の約束がしてあった。

それなのにミナ子は主体的にその男を捨てて、貧乏で、自暴自棄に陥りそうな、就職も何もない、早稲田も中退してしまつたような、病氣持ちの青年を選んだんですよ。だからこの関係が相互的に研究されませんと、ミナ子と透谷の出会い

というのはちゃんと解明されたいと思うのです。いままでの研究にそれが全くなかつたとは申しませんが、ほとんどなかつたわけですね。

私は今度ミナ子の側からその問題に光を当ててみたんです。そうしたら、ミナ子が透谷に出会う前に、すでに平野友輔から逃げようとして一生懸命もがいていたということがミナ子の書いてるものなどで分かつてきた。

私は平野友輔の妻の藤子という人と晩年つき合つたんですが、藤子さんがしよつちゅう言つていました、「透谷なんていう、自殺をして神を裏切るようなダメな文士と張り合つたけれど、よかつたですよ。私は友輔と一緒になつてほんとに幸せだった」と。

藤子さんは百歳まで生きたんですよ。私がお話を聞いたのは九十歳ぐらいのときからでしたけど、その木戸から入つて来たというような調子で話をする人ですから。大矢正夫がその木戸から庭に入つて来て、「透谷が藤沢の国府屋旅館で待っているから、来てくれ」って呼びに来て、友輔が会いに行つたわけですね。そういうような話を生々しくしてくれる人でした。

友輔は捨てられたのですから、すごく傷ついた。ミナ子に捨てられた後、七、八年間結婚しないですものね。すごく傷ついたんでしょうね。

じゃミナ子はなぜ友輔を捨てたんだろうか。それはよくわ

からないんですけれども、とにかく透谷と激しい恋愛に陥る一、二年前からミナ子は明らかに逃げています。そこへ透谷があらわれた。そのとき、ミナ子は、透谷の中に何か純粹なものを見つけて、これは自分の志と一緒に成し遂げていってくれるパートナーになりうる人だと思ったからこそ透谷を選んだと思うんです。

透谷は透谷でまた、自分が見たこともない女の世界を自分の前に示してくれる、しかも非常に靈的で、打算をこえた愛というものを感ぜさせる人だと思って透谷は溺れ込んでいくという、そういうことで彼の劇的な転回ができた。

そういう形而下のことを全部省いちゃって、透谷は政治に絶望して、近代というものに悩んで、とうとう奈落にまで達して、その奈落の底から自力で這い上がってきた。そのときにたまたま出会ったその女がミナ子だったという解釈も、これはあり得ます。

だけど私は、そういう解釈はとりません。透谷は明治二〇年の時点でも、大矢正夫を思想的に乗りこえ切れないでいたのですから。大矢は大矢で徳島の監獄の中で仏教からキリスト教に改宗したりして、出て来るとまたすぐ捨てて、国粹主義者になったりしますけれども。とにかくあの頃の青年というのは状況の中で何度も何度も改宗を繰り返しています。

それから第二の大矢、石坂ミナ子（後の北村ミナ子）との触れ合いの中で、透谷はすばらしい恋愛観を見つけ出します

よね。当時の明治の青年をビックリさせるような「厭世詩家と女性」などです。しかしあの恋愛論は、「恋愛は人生の秘鑰なり。恋愛なくして人生なし」という、その次の行からこの恋愛はだめになると書いてあります。「厭世詩家」、つまり自分のことですが、詩人は恋愛に絶望していくものだと、こう言っているんです。

あれは恋愛讃歌の宣言ではないんですよ。恋愛は精神的なもので、思想を高めるものだ、恋愛なくして人生はない、恋愛を考えるには五十年ぐらい必要なんだとか、いろいろビックリするようなことを言っているんですが、同時に、恋愛が女性というものを介して詩人にとっては苦しみになり、やがて女性をも悩ますことになる、きわめて厭世的な文章に変わります。

つまりそこに表れているのは二つの側面があって、一つはいままでの江戸文学なんかでは公然と表現できなかった、いわゆる近代的恋愛、キリスト教的恋愛と言ってもいいですが、そういうものをつかみ取ったということ、もう一つは自分のような詩人にとっては恋愛が結婚まで進めば必ず悲劇的な結末を迎えるという予言的なこと、その両方が表現されている。

なぜそうなるのかということを問うていくときに、一つは彼の持っている女性に対する、ある意味では明治的な限界でしょう。いまの男性と女性が考えるような、それぞれが対等

な、相互発見されるような他者と他者の関係であるという認識が透谷にはつかみ切れないわけだ。全然ないわけじゃありません。

女性は葛籬^{かぢ}となりて幹に纏^{まと}ひまつはるが如く男性に倚^よるものなりとかと、うまいことを言っておりますけれども。当時の状況の中で、一般論で言えば、明治の大部分の女性は透谷が言ったとおりだと思いますよ。あの時代として透谷はきわめてリアリティーのある女性観を示しているんであつて、そういう点で僕は彼の現実認識が間違っていたとは思いません。だけれども、ミナ子のような女性を相手にして、一つの新しい恋愛観というものを言語化する上での作業で、ミナ子という女性を知っているはずの透谷がこんなふうな女性論を結論づけていくのはいかなものかと恐らくいまの読者なら誰でも思うと思いますよね。

「女性は感情的な動物なれば、愛するよりも、愛せらるゝが故に、愛すること多きなり。愛を仕向けるよりも愛に酬ゆるこそ、その正当の地位なれ。葛籬^{かぢ}となりて幹に纏^{まと}ひまつはるが如く、男性に倚るものなり。男性の一挙一動をもつて喜憂となす者なり。男の愛情のために左右せらるる者なり」。こういうようなことがずうと出てきますよね。

それで最後に、女性はかわいいそうだと。恋愛のときはそれこそ蝶よ、花よと言われるだろうけれど、ひとたび結婚すれば、女性は醜^{みにく}い俗界の通弁となりて、その嘲罵^{ちょうば}するところとなる。

不幸なるは女性かな。その冷遇するところとなり、終生涙をのんで、寝ての夢、覚めての夢に、郎（自分の亭主のことでしょうね）、を思ひ郎を恨んで、遂にその愁殺するところとなるぞうたてけれ、というのが恋愛論の一番終わりのところに出てくる言葉なんですよ。

こういった女性観というのを、いまのフェミニズムの観点から批判するのは簡単です。「なんだ、透谷なんて未熟な男じゃないか」と、これは上野さんじゃないけど、そう言うのは当たり前です。「そんな未熟な男に平岡先生ともあろう立派な人が何で五十年もつき合うんだ」なんて言うかもしれませんけど。そう、フェミニストなら当たり前のことを言うだろうと思うんです。

しかし、ここで当時の明治の女性の持っている一般性に対する透谷のきわめて当然な認識と、それから一つの恋愛観なり恋愛像なりというものを構築しようとするときの女性に対する認識とをゴツチャにしているわけではないんです。

しかも透谷は自分の人生の転回点において、稀なる他者としての自立した女性を発見しているわけですから、それを思想化して新しい恋愛論の展望というものを表現しなければならぬはずなんです。思想家としては、それがなされないのが問題だということを私は言っているんです。

「透谷大好きで何十年も一緒にやってきた男が何でいま頃そんな批判的なことを言うんだ」と言われるかもしれません。

けれども、一九八〇年代という歴史的なシチュエーションで透谷を再評価しようとすれば、それは当然触れざるを得なくなります。

もう一つ、先ほどもちよつと出ましたが、近代国民国家の問題で、明治というのは国民国家の形成期ですよ。いまは国民国家の解体期です。終焉期です。歴史の位相がもう決定的に違います。

ベルリンの壁倒壊に象徴される八九年というのが魅力あるということは、東欧はもちろん、一九九一年になるとソビエト連邦も解体し、いままでコンクリートなものと思われていた近代国家というものに公然と疑問が投げかけられる時がきたということです。

国民国家というのは、考えてみると、その内部にさまざまな異民族、マイノリティー、あるいは女性とか、社会的弱者とか、被差別民とか、そういうものを抱え込んでいる一定の国境内部の住民集団に対して、自分の存在の正当性を納得させるためのいろんな仕掛けを持ったシステムです。

国民文化だの、国家宗教だの、国家愛だの、国旗だの、国民教育だの、国民議会だの、全部イデオロギー的なものであって、これはすべて支配の道具ですね。そこに住んでいる特権層や多数派はそれでいいかもしれない。しかし差別されているマイノリティーはいつもそういうようなもので言いくる

められ、抑えつけられてきたものです。

八九年はその体制が崩壊して一挙に鬱積していた矛盾が噴き出します。ソビエト社会主義連邦も解体する。で、近代国家の存在証明に対する疑いが地球規模で広がっていく時代になってきた。いま西ヨーロッパなんかではもうすでに国家を超えた新しいユニオンを、ECというものをつくらうという歴史段階に入っている。やがて東アジアもそうなるでしょう。そういうときに、近代国家形成期の人間を扱うわけですから、どういう視点をとるべきなのかという、そこを私たちは改めて考えて研究をしていかなくちやいけなのではないかと思うんですね。

明治時代の人にとっては近代国家をつくるということは、もう選択の余地のない一つのコンセンサスであったと思います。江戸時代に戻すわけにもいかないし、近代国家をつくる以外に、あの時代に、日本があのアジアの状況の中、あるいは世界の状況の中で生きていく道はなかった。そしてまた土農工商というような封建的な身分制を廃止して、これはイデオロギーであり、擬制であつても、とにかく「国民」という概念を打ち出すことなしに新しい国家をつくることはできないということとは自明の理であつたわけですね。

ですから明治国家も、それに対決する自由民権派も、あるいはさらにそれを突き上げる下部の、底辺の人民も、その点では結局は同じ方向に行くわけです。ただ、方向は同じだけ

れども、選ぶ内容において違いが出てくるんだと。

たとえば明治政府は国民を結局は臣民——天皇の家来にみたてた。近代国民国家というのは主権は国民にあるものなんですが、日本の場合は主権は天皇にあって、国民には無い。

国民はみんな家来なんですからね。憲法も全部「臣民」と表記しています。明治国家は臣民を核として統合しようとした。それに対して民権家側は国民概念を、中産階級とか、勤労人民、そういうものを置いて中核に考える。

だから明治政府も天皇を主権者とする憲法体制で、議会の権限はきわめて小さい。そういうものをもって国家の近代化を進めようとしたのに対して、自由民権側は君民共治、実質的には国民主権ですね。中江兆民や、植木枝盛や、北村透谷も共和制を目指していますよね。透谷は共和制指向者だと思っています。透谷は天皇のことはほとんど無視、あるいは軽視、そういう態度をとっていますね。デモクラシーという言葉にカッコして共和制という概念を入れています。

もっと明確に言っているのは中江兆民たちですけど、民権側は現実と妥協するという意味で君民共治——天皇と人民とが一緒に治めるんだ、共に治めるんだというような建前に取れますが、実質的には国民主権を指向している。したがって議会の権限は非常に大きくなりますね。でも結局目指すものは近代国民国家なんです。

明治政府は官僚主導ですが、それでも、やはり憲法、議会、

近代的な司法機関、統治システムはみんな欧米諸国がやっているようなものを取り入れて国民国家らしいものをつくっていくわけですね。しかし、これも大きな目でいえば近代国家に違いない。

だから政治的な統治の装置という点では非常に共通しています。ただその内容をどうするか、どれだけの権限をどっちに持たせるかということでは政争があったわけです。しかしひっくるめて見れば、近代を目指したことは民権派側も同じなんです。

透谷はそういった狭間の中で自分の思想を提示しなくちゃならない、位置づけなくちゃならなかったわけです。それで透谷はやがて自分にも疑いを持つわけです。国家のあり方に対しては、少年時代から非常に懐疑を持っていたから民権家になるわけです。やがて民権家の持っている構想にも疑いを持つわけです。両方に疑いを持つようになった。

じゃ結局どこに自分の位置を据えたいのかということようなことは、生涯かかって透谷は結局解け得なかったと思うんです。で、理想論をいろいろあちこちに書いていますけれども、それはあくまでも理想論なんであって、具体的に自分をどこに位置づけたらいいのかということは、しよせんわからなかった。だから「明治文学管見」なんていうのも、いよいよ明治十年代、じゃ自分の生きた時代に入ってくると、もう書けない、中断ということになる。あるいはその後書いた

「国民と思想」という論文も、最後は未来に希望を投げかけるというところで終えているわけです。

彼は国民概念を打ち出しますけれども、彼の国民概念というのは、よく見てみると、空間的には、都市の市民なんていうんじゃないくて、地方の勤労農民のことですね。非常に素朴で、非常に勤勉で、どっちかというと貧しい。当時の日本は八〇%が農民だったと思いますが、その勤労農民に国民の主体を置いているんですね。しかし時間的な概念からいうと、江戸時代の平民が压制下で、自由を求めているという蹈晦をしてきた、面従腹背のようなことをずうっと続けてきた。で、幕末から明治維新にかけてそれが運動になって爆発します。

そのときに自由を求める人民の創造的な力、創造的勢力というのが起こってきます。やがて一応の成果を収めて、それがまた伏流になる、潜伏します。そして人民決起でもう一度その創造的勢力が爆発する。

そして彼は明治二十年代、立憲制が敷かれた後、再びそれが思想的、文化的な意味で創造的勢力として現れることを期待したわけです。これは期待なんです。現実には現れないんです。現れたら、これはナショナリズムの方向に行ってしまうんです、日清戦争以降は。しかしその創造的勢力が現れないと、いつまでも、欧米、あるいはアジアからの外来の勢力、それから過去の勢力、伝統的な勢力、その影響下で、本当の偉大な文化は生まれない、偉大な詩人は存在できないんだ

ということ、最後に、もう泣かんばかりに言っているわけですね。

最後のエッセーの「漫罵」なんていうのは、まさにそれを斜に構えたような表現になっている。大変シニカルな、辛辣な痛罵、国民、民衆に対する痛烈な罵倒を書いているわけです。銀座の街に立ってというんですから、銀座の都市民に対して投げつけているわけですが、しかしそれは彼の苛立ち、過剰期待の裏返しなんです。国民の創造的勢力に未来をかけるしかない、それは必ずデモクラシー、ヒューマニティ—という方向に行くべきものだとつきり言っているんです。共和制を目指すべきものだと言っているんです。だけれども、実際には創造的勢力は起こってこない、その苛立ちが国民に対する恨みつらみのようになって、あの「漫罵」という文章にもう死ぬ間際になって出てくるわけです。

だから透谷は完全に絶望し切っていたとは思わない。それは革命のようなことを考えた青年なら誰でもそうだと思うんですが、愛すればこそ憎むんであり、期待すればこそ絶望するんであって、透谷の絶望がストレートに出たからといって、その期待や希望が失われたということにはならないですね。

亡くなる直前に「劇詩の前途如何」という名論文がありますが、それなんかはほんとにバランスのとれた、あの論文を読んで、どこに精神の失調が現れているか全然わからない。あの論文には精神の失調なんかありませんね。もう完璧なバラ

ンスを保った、実に立派な実践的な論文ですよ。日本の新劇運動の未来を指し示したんですからね。新しい演劇運動の方向に対してあれだけの書ける人は、あの時点ではいなかったわけだし、これは秋庭太郎さんのような偉い学者でも『日本新劇史』の中で特筆大書していますよね、透谷の演劇論の先駆性といえますか。

やがて小山内薫が一九三〇年代になってあの方向を実現して今日の日本の近代演劇を開いていくわけですが、透谷の先駆性というものは大したものなんです。それが自殺直前に書かれているという点を見ると、彼がすべての現実絶望していたなんていうふうには思えないんですね。また精神の失調が早くからあったというふうにも思えない。もちろん神経病質の人ですから、ときどきおかしくなっていたようにですけども、それで全部だめになっていたというわけではないと思いますね。

平岡さんが頑張ってくれたので、もうちょっと時間を使えるようなのでお話ししたいと思います。ミナ子が第二の太矢、第二のキーパーソンとして、彼に神というもののへの信仰を橋渡しした。そしてそれはやがて内部生命というものに対する把握になっていく。で、それが透谷の近代文学としての、実用主義の文学でもなく、快樂主義の文学でもなく、内面の根底を持った近代の文学論として自立させる出発点になったと

したら、このミナ子との体験というのは非常に大事なわけですよ。

果たしてその透谷の神ですね。先ほど平岡さんは二つの点で私にたいし重大な批判をしたんです。一つはこの神の問題ですね。もう一つは人生相渉論争での山路愛山理解ですね。この私の本では山路愛山を大変低く評価している。「愛山を知らざれば透谷を知らず」という、愛山を透谷理解のパロメーターにしていますから、その愛山を私が評価しないんですから、私の透谷論もだめということになるわけですよ。でも平岡さんは非常に優しい人ですからそういう言い方はしないですけれども。

私は、透谷と巡り会う前の愛山、それから透谷が亡くなった後、山路愛山がどう生きたかということは全く捨象しているんです。民間史家としての愛山の高い地位といいますが、大きな役割というのはもういろいろな方々が書かれていますし、私はこれに異を唱えているわけでは全然ありません。愛山と透谷が付き合ったのはほんの二、三年の間。ほんの二、三年を問題にしたのです。

私は愛山は表面で、その後ろに徳富蘇峰という大物がいて、透谷は愛山と戦いながら、実は蘇峰を刺そうとしていたという発想だったんです。ただ蘇峰はずるい人ですから表面に出てきません。ときどき出てくるだけです。愛山がいつも前面に出ている。愛山で民友社を代表させるというような形。そ

の後ろに影響力の大きな蘇峰です。

「親友愛山、主敵蘇峰」という構図は透谷の中にもあったと思いますが、しかし、それは当時の情況の中では分かち難いような関係になっていったと思います。もうちょっと後になると分けられるんですけど、あの時代、明治二十五年、六年ですね、透谷の仕事の絶頂期、また愛山もその頃いい仕事をしています。蘇峰の創造的な活動もあれが最後ですね。あの頃を境に蘇峰の筆鋒はだめになっていきますが、若き蘇峰というのは、明治二十二、三年ぐらいまでは非常にいい仕事をしたのですけれども、その後どんどんだめになっていく。特に二十六年以降だめになっていくわけです。その頃の愛山と蘇峰の関係なんです。それに対して透谷が対峙する。

相手はまさに日本の文壇を動かす力を持った巨大な存在だったんです。いまから見ると大したことないんですが、当時の蘇峰は、個人で自分の新聞を持っている、「国民新聞」という大新聞を持っていて、しかも発行部数が数万部という『国民之友』を出しているわけです。その『国民之友』の文学欄に登場できるか登場しないかで、文士が飯が食えるようになる、認められるかならないかという、以前の『文春』みたいな力を持っていたわけですね。

しかも公的には、大方の認めるところ、蘇峰は進歩主義者で、デモクラシーの味方で、社会改良派で、つまり権力と対抗する、いわゆる民衆の側の言論のチャンピオンとして評価

されていた時代です。その時代にその蘇峰を論敵として真っ向から論争を挑むということは非常に大変だったと思うんですよ。失敗すれば自分のほうが踏み潰されてしまうという可能性があるわけです。

兵糧の糧道を絶たれるというのは、それは構わないかと思えます。どうせ透谷は貧しい暮らしをしていましたし、『国民之友』の徳富蘇峰が透谷にどれだけの恩恵を与えたかといったら、ほんのちよっぴりで、小指の先ぐらいしか恩恵を与えていないんですから。わずか二十五年に二本、二十六年に二本執筆のチャンスを与えただけです。その各二本のうちの一本は短い詩じゃないですか。吹けば飛ぶような詩ですから、あんなのは原稿料一円かそこらでしょう。あとは『エマルソン』でしょ。その『エマルソン』の原稿料もえらく安かったという話ですが、これはよくわかりませんけれども、それでも数百円なんてものじゃない、数十円だったろうと思いますね。

だから私は、透谷は徳富蘇峰なんかを無視して、徹頭徹尾蘇峰を主敵として、『文学界』や『評論』誌で論争を続けていればよかったと思うんですよ。それをなまくらになって、途中で妥協するような言い回しをしたりするから、混濁が起ころんです。そこが、私自身がこれを書いていて非常にイライラしたことです。当時、透谷の正面に立った、衝立のように、屏風のような役割を果たしたのは愛山ですから、彼は愛

山をひどく叩いたんですよ。

この本（東大出版会刊『北村透谷』）を書くとき、私は平岡さんの本を読むと愛山に引つ張られると思ったから、あえて読まなかった。なるべく人の影響を受けまいとして、ほかの人の評論は読まないで書いたんですけれども。

だからこれから先、余裕ができれば、山路愛山論というのを私もやってみて、それこそ愛山の少年時代から晩年、最後までをずうっと見渡して、山路愛山は何であったかと評価し、それで初めて、平岡さんは間違っているとか、やっぱり平岡さんのほうが正しかったとかいうふうに言いたいと思います。この二年間だけの問題ではちよつと愛山の全体評価に触れることはできません。

もう一つは神の問題です。ここには笹淵友一先生の門下の方々、あるいは笹淵先生から教えを受けられた方もいらっしゃるんで、言にくいんですけれども、透谷には「外部に絶対の神あり」というようなことを言い続けたのは笹淵先生です。笹淵先生はこんな本を書いている。新保祐司さんが出て来て突然ショッキングな言い方をするからビックリさせられる。私はビックリしなかったけれども。笹淵先生は一貫して言われているわけですよ。それにキリスト教的透谷論であるとか、キリスト教文学的な理解であるとかって攻撃を加えていたのは、何もマルクス主義者だけじゃなくて、リベラリストも、近代文学の人も、昔は平岡さんのような人も、そうし

ていたですよ。

それは研究史的に見れば、そこへさかのぼって、キリスト教と透谷の問題として、もう一ぺん先行の業績を顧みながらあの新保祐司さんの問題提起をとらえてはならないのじゃないか。若い人が何か勇ましいことを言うと、すぐ調子を合わせるような傾向がありますが、それはどうも感心しませんね。

新保さんが取り上げた他界の概念というのは、「蓬萊曲」の一年後、明治二十五年九月なんですよね。ところがその一年前に透谷は「蓬萊曲」を書いて実在としての他界を扱っているわけです。

私は「蓬萊曲」をよく読んでみて、もう三十年くらいになりますかね、小松方正君が「大魔王」になって、「蓬萊曲」の上演を俳優座劇場でやりましたよね。あれはいまの標しるしの会の一番最初のときで、名田房代さんが昔の名前をまだお使いになっていた頃ですが、あれの惨澹たる劇的失敗は、「大魔王」に一番大きい原因があると思った。

小松方正は私の親友なんです。私と同じ劇団にいたんです。私は昔新劇をやっていたんで、小松君に「なんであんなふうになつたんだ？」「だって、ああやるしかない」と。大体、大魔王を原作に登場させるだけでもおかしい、というより、あれが破綻のものになっているんだ。それをあんなふうリアルに新劇俳優がやつたら、もうメチャメチャじ

やないか。あれをもっと幻想的に、雲の間からちよつと顔を出して、すぐ引つ込むようにやればよかったのだ」と。

それに透谷の原作それ自体に大魔王を出す必然性が弱いんだから。作者が作中人物と同次元にいたんではダメなんだ。透谷はそれを超えたところで対決のシーンを構成できなかった。

それは、透谷が、この頃まだ他界に対する観念の文化史的な異質性に深い認識を持っていなかったから。一神教の伝統を欠いた日本という文化風土にキリスト教世界の大魔王を、いきなり持つてくるということがどんな結果をもたらすかを透谷は十分つかんでいなかった。ドラマは単なる観念の継ぎはぎでは成り立たないのだ。虚構を借りて一つの社会の眞実を表現しなくてはならないのだ。『蓬萊曲』を発表した翌二十五年九月、一年後に彼は他界に対する観念について日誌に次のようにメモし、反省している。

つまり、「キリスト教にあつては、靈魂を重んじ、したがつて生命を重んじ、我にありては靈魂の靈活を知らず、生命の無常のみを知る。世にスピリットなるものあるを知らず。悪鬼、夜叉もこれを信するよしなし。エターナルな思想家、思想、彼に在して、我になし。彼の悪鬼には神通力あり。彼の悪鬼は神の理念なり。我には神通力あらず」

こういう認識が「他界に対する観念」（明治二五・一〇『国民之友』に出てくるんですね。そういう認識の前に、英独の

名作にならつて、いきなり、マルガレーテやファウストに出てくるような大魔王を登場させれば、ほかの劇中人物とのバランスがどんなに崩れてしまふか。そしてまた透谷がそれを日本の読者に、ある現実感、あつて不自然でないという感じを持つて見せることができるかといつたら、それはできないと思うんですね。

その慘澹たる失敗があつたから、その後、他界という観念に対する、もう一ぺん考え直してみようという論文が書かれたのではないのかと私は思うんですね。

この文章を私が書いたのは新保論文が出てくる前なんですよ。こういうことは笹淵さんの発想の中にあつたんです。

もちろん私はマルクス主義者ですから、神が絶対者として私の外に存在するなんて、夢にも信じませんけれども、それは研究とは別なんです。唯物論者だから、あるいは唯物史観を認めている人だから、じゃ幻想世界を扱った作品が分析できないかといつたら、そんなことはないんです。

自分の死の問題と人類の死の問題は別なんです。自分はそういうものを信じてないで死ぬ。けれども、大部分の人はそういうものを信じて死ぬ。大部分の者が信じて死ぬことを尊重しますし、その解釈に合理性さえ持てれば、それは存在できるわけですね。しかし私個人はそうじゃないという。そのところを私はゴッチャにはしたくないと思うんですね。

だから、透谷が他界を論じたり、絶対を論じたり、内部生

命を論じたり、あるいは「我牢獄」のような作品や「宿魂鏡」みたいな、非常にファンタジックな作品を書きますが、そういうものに託されている彼の思想、その文学性というものを尊重しなくてはだめです。それは別に人間の外部にあるプレッシャーとしての神を信じなくなつてできるんですよ。

それで、これは別に平岡さんへのお答えじゃないんですが、「万物の声と詩人」という文章が最後のほうにありますけれども、これはやっぱり外部にある絶対者としての、一神教の神が、万物を統御し、秩序立てる唯一神として外にあつてはじめて歌い出せるというような発想ではないと思うんですよ、この「万物の声と詩人」の次の文章などは。

「宇宙の中心に無絃の大琴あり、すべての詩人はその傍に來りて、己が代表する國民の爲に、己が育成せられたる社會の爲に、百種千態の音を成すものなり。ヒューマニチーの各種の変狀は之によりて發露せらる。眞實にして容飾なき人生の説明者はこの絃琴の下にありて、明々地にその至情を吐く、その声の悲しき、その声の樂しき、一々深く人心の奥を貫ぬけり。」（「万物の声と詩人」明治二六・一〇、『評論』）

そういう観点で見ると、透谷の文章の中に、それできれいに解釈できない文章が幾つもあるんですよ。透谷という人はそういう人じゃないのか。つまり、徹頭徹尾一神教に徹した人でもなければ、また万有教的に、自己を世界にだらしなく広げていった人でもないんで、大きな揺れをしながら、この

数年間、思い詰めて、究極的なものを問い詰めようと一生懸命やった人ではないのか。だから絶対的なものをつかみ得たかということと関係なく、ある絶対的なものを追及しようとした人だというふうに私は思うんですけどね。

そこを、絶対的なものを神として置いていたということをはずしたら透谷論は成り立たないというのは、逆立ちしていうというか、挟すぎると思うんですよ。

その証拠に、新保さんはこれ以外に透谷の読むべき作品はないと言っているんですから。「他界に対する觀念だけだ」と言っているほどですから。それだけなら、何も透谷でなくたって、ほかにキリスト教文学者はいるわけですから、そつちで間に合うでしょう。

時間がもうなくなりましたのでそろそろやめますが。

透谷は没後百年後になつて再生できるかと。私は透谷の思想内容は、未完成なものですし、過渡的なものですし、また百年前の國民國家形成期のいろんな枠組みの中にあつたものですから、思想内容そのものをそのまま使つたり、採用されたりということはないと思うんです。しかし、その思想に対する態度、人生に対する態度、正義に対する態度、恋愛に対する態度、それに対する方法論、これは十分生かしていけると思います。

透谷は國家を超えようと一生懸命努力していました。それ

はいまや現実的な問題です。国というものを越えようと一生懸命努力した。国家とか、天皇とか、忠君とか、そんなものに対して、透谷は百年の後を見よということを書いていた人です。天皇だの、愛国だの、国家だのというのは旧時代の遺物だと、そんなものに迷ってはならないということを書いていた人です。そういう思想態度は百年を超えて生きていくわけですし、いま頃、尊皇だの、天皇崇拜だのという、そんなものはナンセンスで、いま生きていたら恐らく笑い飛ばすだろうと思います。

それからもう一つ、彼の国民概念の一番中核的なものというのは、底辺の人民に対する恐ろしく深い共感なんです。この底辺の人民に対する恐ろしく深い共感というのは、もう二十一、二歳頃の最初の論文から現れて、死ぬまでずうっとそのまま続いています。死ぬ直前になって、妻のミナ子に対して遺言のようなことを言っていたそうです。

これはアメリカの研究者でブラウンシュタインさんという人の論文の中に出てくるんですが、『ザ・クリスチャン・ミッシヨナリー』という雑誌にミナ子が送った通信の中に英文で、ミナ子と透谷の最後の関係が書かれているんですが、そこでこういうことを言っています。

「彼女（ミナ）は彼（透谷）がキリストにほとんど喜びを感じていなかったことに気づいた。彼女は毎日聖書を読み、彼を祈り（一緒に祈ろうと）に誘った。その臨終の間に、

彼が彼女に対して、貧しい人々を、侮られ、恵まれない人たちを助ける仕事を自分に代わって実行してほしいと依頼した」というふうに『ザ・クリスチャン・ミッシヨナリー』誌に書かれていて、これは自殺の後に発表になります。

で、自殺する何日前に、二、三日間、子供を据えて拝んでいたと、これは言い伝えにあります。子供というのは英子さんですね。私は英子さんとも晩年お逢いしたんですが、そう言っていました。「父は私を拝んでいたんだそうですよ。そんな因縁でしょうか、私の娘がまた父と同じような死に方をしました」と。若い娘の黒眸の写真がテールに飾ってあります。

つまり、透谷という人は、最初の出発のときから、この最後の、侮られ、恵まれない多くの底辺の人たち、どうか自分に代わってそれを助ける仕事をしてくれと言っていたところに、私は透谷の持っていた民衆観念というか、国民概念の一番光るものがあると思うんですね。そういうことを残していたということ。その発想とか、真摯な思想態度は百年の後、ますます私どもを励ます力になっていくんじゃないかと思えます。

ですから、きょう早稲田の学生諸君はえらく少ないですけど、でも、決して悲観しません。やがて十年後に再び日本を動かすような大きな存在に早稲田の学生諸君はなるかもしれません。一九六八年の高揚は早稲田と日大から起ったんですか

らね。

それじゃ終わります。(拍手)

○司会

どうもありがとうございました。色川先生の大変刺激的な講演で、われわれは大いに学ぶものがあつたのじゃないかと思ひます。

これから五分ほど休憩いたしまして、ご講演ですと特に質問を受けたり、疑問を發したりということは本来しないのかと思ひますけれども、せっかくこういう機会ですし、まだ時間もございますので、質疑応答をさせていただくことにしたいと思います。

(休憩)